

下門前諸家文書目録解題

下門前諸家文書は、上越市大字下門前の6つの家に伝来した文書および町内会文書をそれぞれ整理しまとめたものである。

下門前は近世には頸城郡門前村と称したが、明治12年(1879)に同じ頸城郡内の門前村との区別のため下門前村と改称し、同16年に西方の今善光寺新田を合併した。

門前村の由緒について、中澤肇氏の「下門前史考」(『越後府中雜記』北越出版、昭和60年)によれば、上杉謙信が弘治年間(1555～58)に信濃の善光寺を戦火から守るために越後府中へ移した際に、その門前の者たちが、当時関川の西岸にあった長慶寺の門前に住みついたとしている。

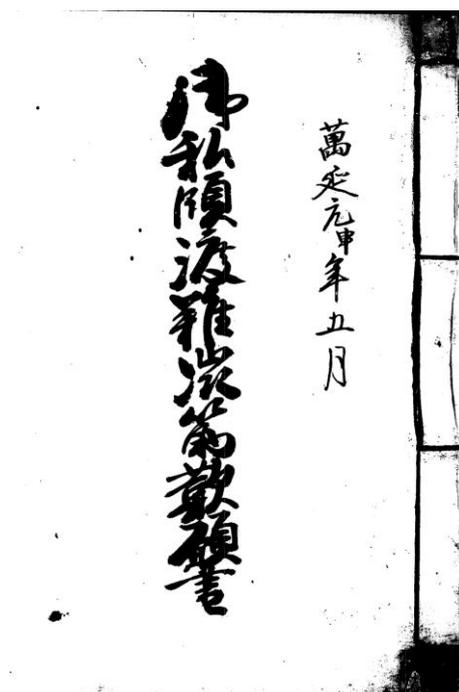
このように古い立村の歴史を持ち、また当時の事情から得た諸役免除の特権を保全するための配慮もあって、市内では数少ない近世初期の史料である堀氏の文書を伝存している。どの史料群も全体に保存状態はよい。また近年、史料展示会を開催するなど地区全体で史料保護の意識が高く、上越市史編さん事業における史料収集に際しても全面的な支援を得ることができた。

史料群は2112点を数え、そのほとんどが近世から昭和初期に及んでいる。内容別には年貢関係諸史料に次いで用水関係が多く、この地域が受益し、時には出入の対象となった大道郷用水(大道用水・富岡堰用水・源入堰用水・池田用水等)や中江用水のものが多く見られる。とくに大道用水の開発が慶安年間(1648～52)であることを示す史料は初見である。

地域的な特性からくるものとして、関川・保倉川の舟運についての今町との紛争、関川の川欠けにともなう普請、諸役免除と継ぎ目に関すること等をあげることができる。

天和の検地帳とその後の新田検地帳、村明細帳等の地方基礎史料や、小作・村入用の関係史料も多く残されている。

その他、異色のものとして、万延期(1860～61)の越前鯖江藩間部家領への反対運動に関するもの、天保・弘化期(1830～48)の長嶺村(板倉町)佐源次の新江開削計画に伴う長期の出入に関するもの、日露戦争従軍に関するもの等が挙げられる。



「御私領渡難渋筋歎願書」
(万延元年5月)
間部下総守私領渡しの件写